



TITLE:

朝鮮地名の考説(三)

AUTHOR(S):

中村, 新太郎

---

CITATION:

中村, 新太郎. 朝鮮地名の考説(三). 地球 1925, 4(3): 243-249

ISSUE DATE:

1925-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182992>

RIGHT:

## 朝鮮地名の考説(三)

中村新太郎

## 三 施設に關する地名

官や公共の施設に關した地名は多くない、其の著しいものを舉げて見る。

倉及昌 は同音でチャンクである。昌は倉を書き代へたものであらう。倉には租穀貢米を貯藏するものもあり、荒備のものもあり、兵備のものもあつた。第一の意義の倉は現代のことで云へば政府の專賣事業である葉煙草を納れる倉庫に比敵するものである。朝鮮では一般のものが自己の所藏物を納める特別の倉を持つて居なかつた。特別の場合として都家と稱する共同倉庫を開城の商人達が所有して居るに過ぎなかつた。それで倉と云ふ字の附いた地名は悉く官設の倉庫があつた處である。東倉、南倉(南昌)、新倉(新昌)、内倉、別倉、假倉などの地名が多くあり又檜倉、岐倉、社倉等數ふるに暇がないが、倉を附けた地名は平北、平南、咸南に殊に多い、蓋し邊境に備へた軍倉も少か

らずあつたのである。其の位置も峠のすぐ近所にあつたり、河岸の稍著しい平地にあつたりする。

全南海南郡には海倉、黃海載寧郡には海昌があり、慶北善山郡の洛東江畔には江倉がある。又單に倉里又は倉洞と現に呼ばれる集落が少なくない。若し朝鮮百五十萬分一圖を凝視すると點在する倉をつけた集落が眼底に映つて来る。今まで云ひ残したが本稿の讀者が座右に朝鮮總督府編小林文七地圖店發賣の朝鮮百五十萬分一地圖(定價五十錢)を備へられんことを御奨めする。

昌は倉よりも地名に多く附けてないが、郡名として淳昌、居昌、厚昌、平昌、昌城、昌寧、昌原がある。咸南の金昌といふ處は昔砂金の產地であつた。

驛、站、院 は共に舊時の遞傳の制を残したものである。每四十里(一里は我が三町五十一間に當る)に驛を置いた、驛は公文を傳遞し公用の馬匹を供した所である。驛と驛との間には撥站(バルチヨム)を置き驛馬を交代する中繼場とした。大河に沿うては水站を設けた。驛に設けた館舍(宿舍)を驛院と云ふ。東國輿地勝覽には驛院の項があつて驛院名と邑からの里程が記されてある。

地名の下に驛をつけて呼んだものであるから現今の地名には驛の字が除かれて居るが間々驛里、驛村里、古驛里などの地名が残つて居て昔の驛路を忍ばしめるものがある。驛に屬した田畑があつて驛の費用に充てた、之を驛田とか驛土とか驛番とか云つた、又其の收穫を驛馬の飼養に充つる田畑を馬位番及馬位田と云つた。驛田里、馬田里等の地名がまゝある。驛馬を徵發する信となす馬牌があつた。馬牌は徑二寸五分内外の圓形の銅牌で一面には一匹乃至十匹の馬形を、他面には年月など

を刻したもので鑄刻された馬の數だけ徵發されるものであつた。李朝の末年には似せ馬牌が濫用されたといふことである。

院の附いた地名はかなり多く現存して居る。現に京釜線の鳥致院、京義線の沙里院は新勃興の貨物集散地として著しい處である。然し又寂漠たる山間に院の附いた地名も残つて居る。嘗て平北寧邊郡曲波院を過つて其の餘りに寂しい所に院と稱へられる地名を訝かり、之を土人に質したところ旅宿があれば即ち院だと答へたものゝ、實は其處が舊時の驛傳の一に當つて居たものと思はれる。院に附屬した田畑を院田と稱へた、院田と云ふ地名もある。

撥站は擺撥(ババル)即ち飛脚の中繼場である、黃海平山郡には撥站里があり咸南豐山郡安山面老隱里のうちに把撥といふ小集落が厚峙嶺の北の甲山街道にある。又把撥嶺と云ふ峠が平北渭原郡にある。京畿高陽郡には舊把撥里がある。把は擺に同じい。站は驛站でなくても平北熙川郡での様に里名の下の地名につけて小字を現はすことがある。

館は文事を掌る役所にもつけたが——弘文館とか均成館の様に——地名に附した館は客館であるか又は官吏の駐在所かであつた。倭館は慶北の都邑であるが古くは日本からの使臣をよめた倭館は此處ばかりでなく數ヶ所にあつた。大館平北などがあり碧蹄館は内地人に取つては幼時におぼえる地名である。稀に客舍里といふ地名もある。

亭 は亭閣、亭榭で休み場である。道しるべのある所である。松亭里、石亭里、舟亭里、江亭等と云ふ様な地名が甚だ多いのは驛路を點綴した所謂五里の短亭、十里の長亭であつたのである。但し射亭と云ふのは武班の鍊武場で主に射を習つた所である。射亭里は所々にある。

堂 は祭祀を行ふ小堂である。舍堂里、元堂里、新堂里等の地名があり佛堂里又は佛堂洞と呼ばれる所が甚だ多いが今では大方はそこに佛寺がない、新羅や高麗の佛教の盛であつたときの遺物である。現代の民間信仰の堂に城隍堂(ソングホ・アングダン)俗にソナングデンと云ふ)がある城隍神即ち土地の神を祭つた哀れな小さな祠堂で低い峠の傍や路傍の樹のある處などにある。それで小さな峠にソナングデンと云ふ名のあるのが少なくない。江原金化郡の堂峴(タンコケエ)では嘗て獨逸人が砂金を探収した。堂峴は城隍堂のある峠と云ふ意味である。

校 邑には必ず郷校と文廟即ち孔子廟とがあつた。郷校洞、校洞里、校村里等の地名が郡邑の附近にある。邑を離れた地方の學校は寺小屋式のものであつて之を書堂(ソダング)と云ふ。書院と云ふのは學者を祀つて置いた處で南鮮には書院里なる地名がまゝある。

郡衙里、官廳里、官里等は役所の所在を示した里名であつて邑内にある。

宮 李朝以前の宮殿又は都のあつた處に宮のついた里名の残つて居るものがある。京畿廣州郡春宮里の宮村は百濟國都の址だとされ、猶は同郡には宮内里、宮坪里がある。平南大同郡斧山面南宮

里は高麗朝大華宮の址だといふ。京城には近頃まで宮内洞、五宮洞、儲慶宮洞、宮基洞、統祥宮洞、宮洞等の洞名があつたが皆新しい名に代つて了つた。

鎮、堡、屯 は共に武備を施した箇所である。咸北の六鎮（茂山鎮古くは富寧、會寧、鍾城、穩城、慶源、慶興）の様に鎮堡は邊境に多かつた。鎮堡のついた地名はかなり多い、惠山鎮は現在鴨綠江上游の伐木の中心であり中江鎮は鴨綠江中流の主要部落である。雲山郡の北鎮は米人の經營する金鑛所在地として名高い。釜山鎮は釜山に連續した移輸出入の貨物の陸上積込地である。堡をつけて呼ばれる所も鴨綠江近くには少くない、普天堡、仁遮堡、羅暖堡は惠山鎮の上流と下流とに點在して居る。伐（ボル）と云ふのも堡に似たものであらう、鴨綠江畔には高句麗の首都國內城のあつた處だと云はれる滿洲輯安縣の通溝に對して伐登鎮と云ふ小堡の址がある。京畿金浦郡には屯伐里といふ小地名がある。尤も新羅時代には伐は都邑を意味した、國都慶州を徐耶伐と呼んだのは其の一例である。屯又は屯地と云ふのは小武備地で山間の谷の分岐點などに位する。屯田兵を置いて屯に屬した屯田を耕さしめた處である。慶北奉化郡には遠屯といふ地名があり、京畿廣州郡には屯田里といふのがある。又何々屯地と云ふ小地名を諸處に見受ける。江華島では鎮の下にある小堡を墩としたが地名には見當らない。

營 は主に水軍の根據地である。慶南の統營は李舜臣以來三道（慶尙全羅忠清）水軍統制使の駐在

地であつた、統營は今では塗物と水産物と金鑽石の産地として著しい海港である。全南海南郡には右水營、康津郡には兵營がある。營は水軍について許りでなく陸内の鎮堡についても云つたので軍營里と云ふ地名は京畿漣川郡等にある、平北宣川郡には古軍營洞がある。

### 烽燧

は邊警を都に傳報する爲に山嶺に設置したもので平時は一炬、賊の現出には二炬、近境には三炬、犯境には四炬、接戦には五炬を揚ぐるものとし、夜間は舉火し晝は煙を起した。起煙するには濡れた藁を燃して水蒸氣を起した。嘗て英人ベルチャーが濟州島を測量した時に鮮人の外人來れりと舉げた起煙を習つて測量の合圖に用ひた。烽燧は俗にボンゲウジェと云ひ煙を舉げる所を烽臺又は煙臺と云ふ。烽臺は見通しのきく山嶺に置かれたので、後に小三角點が置かれた處が少ない。輿地勝覽には烽燧の項があつて一々の烽燧に其の位置と之に應ずる南や北の烽燧が列擧されてある。又大東輿地圖や金正浩の輿地圖には朱で蠟燭の焰の様な形を畫いて烽臺の位置を示して居る。位置が山上にある爲め地名として残つて居るのは多くない。滿洲の煙臺もそれであるが我が朝鮮には小谷の名として煙臺谷平北朔州があり、京畿加平郡には烽燧里があり、京畿金浦郡梧柳洞に烽火村があり、江華郡には煙里がある。

陵、陵を附けた地名は往々ある。郡島名としては江陵、鬱陵島がある、これは岡の意義があつて大きな墓を表はしたものではない。開城附近には高麗王のや王族の陵墓が多いが地名としても韶陵

里、嘉陵里等がある、京城の四近にも貞陵里、思陵里、佳陵里等があるがこれは李朝の陵墓に屬する。この外南鮮にもまゝある、陵洞と云ふのは各處にある、其の一部は舊代の王陵がある所である墓のことについては地形に關する地名中山の條下で述べるとする。

墳 塚である。京畿富川郡には馬墳里、同じく振威郡には海倉里のうちに長墳里がある。これ等は恐らく王陵の様な大きな陵墓のある處である。馬墳といつても馬の塚ではなく主墳を意味すると今西博士は述べられて居る。(未完)

## 丹後但馬震災地方海面調査の結果

水路部は五月二十三日の但馬地震の爲めに沿岸の地形及水深に變化を及ぼせるや否やを六月二十二日より二十七日に至る間に於て調査し其の結果を五萬分一及九千百分一の二葉の海圖とし、附するに次の説明を以てし七月六日之を發表せり。之に依れば久美濱灣内佐野谷川口附近一小部の外殆ど變化なきものと認めらるゝなり。其の説明左の如し、

久美濱灣北側の沙濱所々低下し高さ約一呎の斷層を生ぜる個所あり。

同灣佐野谷川口北側桑島數反歩海中に没し水深約四分の三尋又川口の南方水田約七丁歩海中に没し水深約二分の一尋となる、此の附近は佐野谷川三角洲にして沙泥より成る脆弱なる地盤の爲め没陸せるものなり。灣内一般水深には變化を認めず。田久日部落の東方山腹に高さ約一呎の小斷層あり。

## 朝鮮地名の考説

田結部落北東方鉢ヶ成の山頂より中腹に至る附近諸處に斷層を生じ大なるは高さ約三呎長さ數町に亘るものあり。鉢ヶ成の海に面したる急峻部には數條の崩れを生じ降雨毎に今尚崩壞するものあり。

津井山沿岸には海に接したる石垣の一、二呎低下せるもの數ヶ所あるも極めて小區域にして全く地盤軟弱の爲なるべし。捨ヶ鼻及猿ヶ城附近斷崖崩壞し一層峻峻となりたるもの數ヶ所あり。

津井山港内細卷鼻より氣比の海岸一帯は年々圓山川の汎濫によりて土沙堆積し舊測量當時に比すれば約千來陸地に變ぜり、從つて二尋界線附近までは河水の作用による變化相當大なるものと思はる。此等は地震とは關係なく舊測量以後漸次變化せるものと認む。

附記 津井山港に於ける内務省土木出張所及丹後國伊根港に於ける水路部設置の兩自記驗潮儀曲線には震災當時何等の變化なし。